

不登校予防の「王道」 ～不登校ゼロを実現した大規模小・中学校の実践から～

名城大学 曾山 和彦 教授

1 はじめに

- ・王道とは、「最も正統的な道」「基本的な道」「一番太い道」という意味である。
- ・教師や保護者、研究者が尽力しているにもかかわらず、全国の不登校数は5年連続で増え続け、平成29年度には14万人を超えた。
- ・中学校に進学する際、不登校数は約3倍に増える（中1ギャップ）。そのため、小中連携が重要となる。

2 鳥取市立桜ヶ丘中学校の実践より

- ・平成28年度、短時間グループアプローチ「桜咲（さくさく）タイム」を導入し、全校で週1回実施する。
- ・平成28年度の3学期、校区内4小学校に「桜咲タイム」の出前授業を実施する。
- ・平成29年度1学期、中1不登校ゼロを実現する。
- ・平成29年度11月、小林昭文先生提唱のアクティブラーニング授業を導入する。
- ・平成30年度、自主公開研究会を実施する。
- ・Q-U（H30）において、学校生活意欲尺度、学級満足度尺度ともに全学年で全国平均を上回る。小中連携等の効果が客観的データにより実証される。

3 人が人になるには人が必要

- ・人とのかわり体験の不足が、自尊感情やソーシャルスキルの不足に繋がっており、「不登校・いじめ・気になる子」の課題に直結している。
- ・家庭や地域で子どもを育てる力が弱まってきている。
- ・学校は「人を人にする最後の砦」。臨床心理士（スクールカウンセラー）、社会福祉士（スクールソーシャルワーカー）、弁護士（スクールロイヤー）等と連携しながら、「チーム学校」として支援する必要がある。

4 SImple(Slim&Simple)プログラム

- ・スリンプルとは、スリムとシンプルを繋ぎ合わせた造語。複雑な工程のプログラムでは長続きしない。
- ・安心感（ルール）がなければ、友だちとかかわることはできない。
- ・かかわりの糸（ふれあい）が結ばれなければ、国が目指している授業改革は進められない。

5 演習「アドジャン」

- ・前半はソーシャルスキル・トレーニング、後半は構成的グループ・エンカウンターとして展開し、最後にグループで振り返りをする。
- ・「エクササイズする」「人数を決める」「時間を決める」など、「枠」をつくる必要がある。
- ・各教師が自由にアレンジして型を崩してしまうと、学校一枚岩の取組ではなくなってしまう。

6 ソーシャルスキル・トレーニング（SST）

- ・山本五十六の言葉「してみせて 言って聞かせて させてみて ほめてやらねば 人は動かじ」はSSTの核心をつく言葉である。
- ・SSTは「行動」の教育。思考面でなく行動面を一致させることが大事。
- ・まず、「挨拶を大事にしましょう」「領いて聞こうね」「指示を聞こうね」などのルールを提示し、モデリング（模範演示）、リハーサル（実行）、フィードバック（価値付け）に繋げる。SSTは「型」が大事である。

7 「穴の空いたコップ」理論

- ・「夜に爪を切らない」「夜に口笛を吹かない」などのルールを教えるのは大人の役目である。
- ・下に穴が空いているコップに水を溢れさせるためには、どんどん水を入れ続けなければならない。同じように、気になる子には、みんなで声をかけ続けることが大事である。
- ・「オニの心」（好き勝手、わがまま）を鎮めるのも、鎮め方を教えるのも大人の役目である。

8 子どもは遊ぶが如し 私たち教師は…

- ・教師は、活動のねらいをもって子どもの前に立たなければならない。
- ・適切な行動に対して価値付けをしていくことが必要。ただし、「えらいね」「上手」「さすが」などの「ユー・メッセージ」は、小さな子には有効だが、

中高生には必ずしも有効とは限らない。「ありがとう」「うれしい」「助かる」などの「アイ・メッセージ」で伝えると効果的である。

9 「型」は飽きる？ ～桜ヶ丘中学校の取組より～

- ・担当者を変える、子どもに質問内容のアイデアを聞く、全校オリエンテーションの機会を設けるなどの工夫をすることで、子どもが飽きずに取り組むことができる。
- ・なぜ「桜咲タイム」をするのか、ねらいや目標とする姿を明確にし、全校で具体的なイメージを持たせることが必要である。

10 熊本市立託麻東小学校研究発表会における紹介映像の視聴

- ・「託東タイム」の取組。
- ・生徒指導の三機能（①自己決定の場を与える②自己存在感を与える③共感的な人間関係を育成する）を生かした取組。

11 まとめ

- ・「一枚岩」で取り組む。
- ・「漢方薬」&「妙薬」を処方し続ける。
- ・「先輩」（先進校実践）の言葉を信じる。